ミャンマーの日常生活に見られる林産物利用

池　本　佐栄子

はじめに

ミャンマーに初めて来た人が一瞬「？」と思うことがある。とくに田舎に行くとそうなのだが，若い女の子達や子供から中年の婦人にいたるまで，実にさまざまな模様で頬や額に白くお化粧していることである。よく見ると若い男の子がニキビのあとに，ポツッと塗っていることもある。これは“タナカー”と呼ばれるミカン科の樹木の樹皮を，チャオピンという石の硯の上で墨のようにすり，水に溶かして塗っているのである。私も愛用しているが，塗った時にヒヤッとした清涼感と甘い香りがあり，肌が柔らかくすべすべになってくる。日焼け止めにもなるし，肌が少しオイリーな人には「余計な油分を吸ってくれるみたい」と大変好評である。この樹木の正体は *Hesperethus crenulata* で，ミャンマー中央部の乾燥地で多く生産され，プランテーションもある。苛酷な土地で育ったものほど香りがいいそうだ。このタナカーを代表に，ミャンマーでは日常的に色々な林産物が使われている。ここではミャンマーの人々が日頃よく使っているものをいくつか紹介してみたい。

1.　美容品として

まず，はじめに紹介したタナカーと同じように，美容のために使われているものとして，タヨー・キンムンというシャンプーがある。これはタヨー（*Grewia tiliaefolia*）というシナノキ科の樹皮を石でたたいたものを，ムクロジ（*Sapindus mukorossi*：キンムン・ディー）の実をゆがいて冷ました液の中に数日浸けておき，その液体をシャンプーとして使うのである。実から出たエキスが石鹸の役割をし，タヨーの樹皮からでてくるぬるぬるした液がリンスの

IKEMOTO, Saeko : Daily Uses of Non-Wood Forest Products in Myanmar
京都大学大学院農学研究科・現在ミャンマー森林研究所に留学中

役割をするそうだ。

このシャンプー，すなわちタヨーの樹皮とムクロジの種子の入ったものが，ポリ袋に入れられて市場でよく売られている（写真1)。私も実際使っているが，泡が立たないので何となく物足りない。しかし，洗いあがりはさっぱりしていて悪くない。使い続けていると，髪が何となく椿油でも塗ったかのようにしっとりとしてくる。そういえばデルタのマングローブ林を調査している時に，手伝ってくれる女の子が髪の毛を黒々と見せるためにヤシの油を塗っていたのを思い出した。昔の日本のように，この国ではまだ黒々とした長い髪が女の命なのだ。

写真 1　タヨー・キンムンを売っている店，これで1袋10チャット

また，このシャンプーは抜け毛を防ぐらしい。そちら方面に興味のある方は，ミャンマーに来られることがあれば試されたらいい。ちなみに，首都ヤンゴンの市場で一袋（500 m*l* 位）10 チャット，田舎に行くと 2 チャットという安さである。

しかし，このシャンプー，漉して使わないとムクロジのカスなどが乾いた髪に残り，ふけの様になるということで若い女の子にはあまり人気がない。最近では，エキスだけを抽出した製品もあるそうだが，外国製のシャンプーに押されてこれもあまり人気がないようだ。

余談だが，初めタヨーと聞いて一瞬ギョッとした。というのも私の調査しているデルタ地帯では，タヨーといったらトウダイグサ科のシマシラキのことを指す。この木は樹液に毒を持っている。こんなもので洗ったら，髪の毛がごっそり抜けてしまうはずだ。よく聞いてみると発音が若干違うのだが（シナノキ科のタヨーは低音で延ばし，シマシラキは高音で延ばす)，何とも紛らわしい。

このシャンプーは子供が生まれて 7 日目に頭を洗う儀式にも使われる。その場合，家人は自分でこのシャンプーを作り，近所の人や親戚に配る。また，何か困ったことがあった時なども，このシャンプーで家の仏壇を洗うといいらしい。

その他の美容品として，タナカーと一緒に白檀（*Santalum album*）も削って粉にして塗ることがある。これは香り付けが目的で，さしずめ固形香水といったところだが，なぜか漢方薬売り場で売られていた。不思議に思って尋ねたら

肩凝りの時に，タナカーのように水に溶いて塗るといいそうだ（私は凝り性でないので確かめようがないが）。ちなみに値段は1kgで10,000チャット。インドのムンバイ（ボンベイ）あたりから来るそうだ。しかし，この白檀は顔に塗るとそばかすができると信じられており，顔には塗らない。この他に香りがいいのでからだに塗っているものとして，タウン・ナン・ガドーという学名不明のものもある。これもインドからくる舶来品だそうだ。値段はこちらの方が白檀より若干高い。

2. 日用品として

どこの市場にも木片だけを扱っている店がある。ティンシュージと呼ばれるケシアマツ（*Pinus kesiya*）の樹脂の多い心材部だけを売っているのである（写真2）。ミャンマーは首都ヤンゴンでも電力事情がかなり悪い。現在でも二日に一日は停電というところが多い。電気が来ない場合，自家発電機を持っていない多くの家庭は，炭や薪を使って炊事をするので，その時に火起こし用に使われている。多くはシャン州から運ばれてくる。長さ30cmの小片で15チャット，細く裂いて30片ほど束にしたものが50チャットであった。

この松の心材は私の調査している海岸部の村などでは使われているのを見ない。それを買うほどの余裕すらないのだろう。そういう意味ではある程度大都市で消費されているものかも知れない。

写真 2　マツの心材売り：この店はこれしか扱っていない

ティンシュージが市場の中で堂々と売られているのに，炭や薪は大きな需要があるはずなのに，ひっそりと売られている。この“ひっそり”というのは，たいてい市場の建物の中ではなく建物の裏，外側の目立たない所で売られているということだ。私は違法に作られた炭でも売っているのかと思っていたが，聞いてみると何のことはなく，建物内だと一店舗に与えられるスペースが狭く，炭屋は場所を取るので建物の外側でしか売れないとのことだった。

この店で売っている炭はモン州からくるピンカドー（*Xylia dolabriformis*）の炭で，1kg約30チャットで量り売りされている。ちなみに写真の手前に写っている袋が16kg入りで480

チャット（写真3）。やはり生活必需品は安い。炭の生産者は森林省から許可書を取らなくてはならないが，小売業者はとくに許可書は必要ないそうだ。

私が調査しているデルタ地域のマングローブ林は，近年の薪炭材の過剰供給で丸裸にされた。93年以降マングローブ林での薪炭の商業的生産は禁止されているが，薪炭の需要は変わらないので，現在では主にミャンマー中央部や東部で生産された炭や薪が売られている。イラワジ管区のマングローブ林の辿ってきた運命が，他の州の森林にのしかかっているのかと思うと気が重い。森林蓄積量回復のための一時的な伐採禁止であるが，早く健全な生産活動ができるように，荒廃した保護林に有用樹の植栽をするなど積極的な行動が求められる。しかし，現状では絶対的に資金・指導者・設備などが足りないようだ。

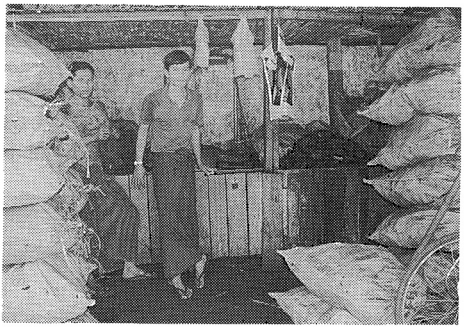

写真 3　炭屋さん，16 kg 入り袋が 480 チャット（約 150～180 円）である

写真 4　花屋で売られているフトモモの葉

3.　宗教用として

市場の花売り場には一年中フトモモ（*Syzygium jambos*）やクロトン（*Codiaeum variegatum*）の枝が束になって売られている（写真4）。これは仏壇に供えたり，商用の乗り物（バス・船・サイカー（サイドカー付き自転車）など）の前に魔除けとして取り付けられる。たまに女性が髪に飾っているのも見る。クロトンの方は白い斑が入っていたり縁が波打っていたりして鑑賞用としても美しいので好んで捧げられているのはわかる。しかし，ありふれたかたちのフトモモの葉がなぜ好まれるのか不思議だったが，その理由は名前によるものだった。この木のミャンマー名は勝利を意味するアウン・ダビューという。

このため以前は戦地に赴く兵隊にもこのフトモモの枝を渡したそうだ。また，仏壇に供えるのに樹木の枝の方が花より長持ちして経済的であるという現実問題もある。

余談だが，ミャンマー語は同音異語が多いので，宗教用に使われる植物も言葉の語呂がいいものが選ばれたりする。たとえば沖縄で‘えん菜’と呼ばれている野菜（空芯菜）はミャンマーでガゾン・ユェというが，スペルを他の同音異語に置き換えると『運が開ける』というような意味になり縁起がいいので仏壇に供えられたりする。また，同じような意味でサトウキビは『考えが思いつく』ということで，悩みごとがある時に仏壇に供えられたりする。

ミャンマーでは仏教信仰と同時に，ナッという精霊信仰も行われる。これらの精霊は仏陀より一段低い所に位置づけられているので，より人間的で好き嫌いが多い。ナッには香りのいいものやきれいなものがより好まれる。前述のタナカーや白檀は家の中に備えられたナッの祭壇に振りかけて機嫌をとるために使われることもある。しかし，キンコウボク（*Michelia champaca*）はナッが嫌うので決して供えてはいけない。これは昔，ナッの一人がこの木共々焼殺されたという伝説に基づいている。

4. 薬として

薬としての林産物利用は新旧入り交じってとにかく多い。ここでは市場でよく売られているものをいくつか紹介する。

タウン・ナンジー（*Pterospermum lanceaefolium*）は，ヤンゴンでも路上で売られているのを見かける。デルタの村ではよく使っている，マングローブ後背林もしくは海岸地帯に見られる樹木である。ヤンゴンで売られているのは，たいていタニンダーリ管区のダウェーから来ているものである。これはタナカーのように使うが，効用はタナカーと反対で，塗ると熱くなる。そのため雨季などの寒い時に，関節痛持ちはこれを塗る。また，産後の婦人は疲労した腹の筋肉の回復に塗る。

カラーメッ（*Mansonia gagei*）は材に香りがあるために美容品として体に塗ることもあるが，主として薬として使用する。ミャンマー人は，魚や肉が焦げた時の匂いをアニョーといって嫌う。生まれたての赤ん坊や産後の婦人，怪我人などにこの匂いはよくないとされている。彼らがこの匂いを吸ってしまった時，カラーメッを水で溶いて飲む。また結膜炎を起こした時に，目の周りに塗るとすっとして効くらしい。この樹木もタニンダーリ管区のダウェーから来た

ものである。

市場では，年中調味料としてのタマリンドの実が売られているが，同時にマジー・ハウンと呼ばれる土の中に埋めて発酵させたものも売られている（写真5）。これを一晩水に浸けて翌朝タニェと呼ばれるオウギヤシ（*Borassus flabellifer*）から取った砂糖を好みに混ぜて飲む。便秘に効くそうで若い女性は現在でもこれを利用している。このジュースはテレビで大々的に宣伝している‘VeVe’という製品になって出まわっているので愛用者は多いのかも知れない。

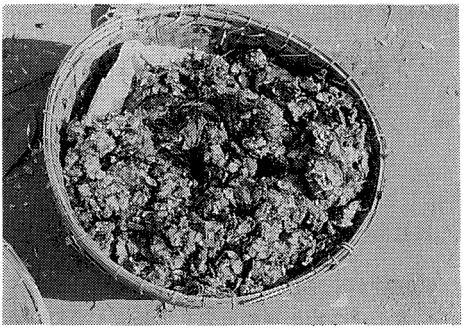

写真 5　マジー・ハウンと呼ばれるタマリンドの発酵食品

ミャンマーで使われている林産物には多分にその効用を疑われるものもある。これだけ多くの人達が愛用しているタナカーですら，化粧品としての有効性が科学的に見つけられなかったという話を聞いた。しかし，タナカーを使うと肌が柔らかくなるのは本当であるし，タヨー・キンムンのシャンプーを使うと髪の毛がしっとり黒々してくるのも本当だ。効用は科学的でないとしても，先祖代々の知恵を使って豊富な森林資源を利用しているミャンマー人の暮らしに豊かさを感じる。森林の有効利用やこれからの森林の造成にはこの様な‘森’との身近さが重要だろう。森林の豊かさと身近さは市場を覗くとすぐに感じとれるのである。

---

* 政府発表の公式レートはUS＄1＝6チャットだが，実質レートはUS＄1＝300～350チャット（1998～99現在）